

「知のプロフェッショナル」育成を目標として掲げた。アカデミック・リンク基盤強化の方向性として、これまでの基本概念である「コンテンツ・ラボ（コンテンツ）」「ティーチング・ハブ（人的支援）」「アクティブ・ラーニング・スペース（学習空間）」をそれぞれ「デジタル・スカラシップ開発」「学習支援高度化」「リサーチ・コモンズ推進」へと発展させた。



写真1-2-4-2 アカデミック・リンク松戸

また、アカデミック・リンクの全学展開として、附属図書館松戸分館の改築を契機に「アカデミック・リンク松戸」を2020年10月に完成させ、園芸学部・同研究科の教育に適した教育・学修支援活動を展開している。

### (3) コロナ禍への対応

2020年春に始まったCOVID-19パンデミックによりキャンパスへの入構制限がなされたことから、アカデミック・リンク・センターおよび附属図書館では、一部窓口サービスを継続しつつもオンラインでのサービス・支援の提供に全面的にシフトすることとした。具体的には、1) 電子書籍の重点整備（その後「電子書籍重点整備方針」を策定）、2) オンライン学修支援ポータルEYeL!の構築・提供、3) メディア授業のための図書館所蔵資料の電子的提供、4) 学習支援デスク等のオンライン化である。その後入構制限も解除され、キャンパスに学生が戻ってはきたが、本学が推進するスマートラーニングに対応した学修支援体制の構築という観点から、支援のハイブリッド化あるいはオンライン化をさらに進める予定である。

## 第5節 スーパーグローバル大学創成支援事業・ 大学の世界展開力強化事業

千葉大学の本格的なグローバル化は、20年ほど前から始まっている。つまり本格的には21世紀になってからとなる。したがって千葉大学の1999年（50周年）以降の

この25年間は、まさに「グローバル化の推進の時代」であったことになる。

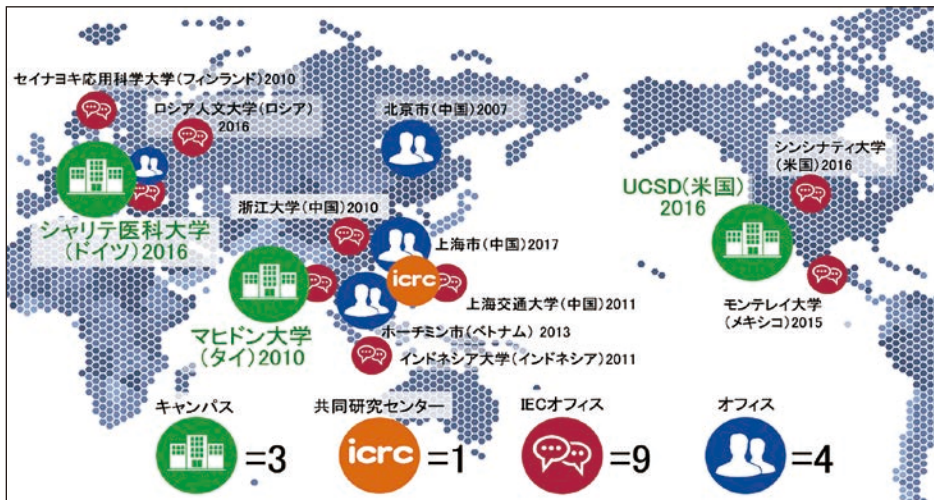
2007年には、日本学術振興会（JSPS）の北京事務所に北京オフィスを開設し、それを記念したシンポジウムの開催（清華大学）と、千葉大学中国校友会を発足した。その後、2010年には、International Exchange Center（IEC）オフィスを、タイ・マヒドン大学、中国・浙江大学、フィンランド・セイナヨキ応用科学大学に相次いで設置した。

その後幸いにして、経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業（グローバル人材育成推進事業）（2012年）及びスーパーグローバル大学創成支援事業（2014年）に採択され、着実にグローバル化を推進してきた。これらの2つの事業の支援により、のちに国際教養学部となる、全学共通教育の国際日本学を設置（2013年）、2016年には、看護学部以来41年ぶりに新たな学部である「国際教養学部」を設置することができた。

2012年に採択された、経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業（グローバル人材育成推進事業）では、イングリッシュハウスの開設を行った。当時の生協の購買の部分を中心に全面的に改修し、西千葉キャンパスの中心に設置された。さらに、全学共通の「国際日本学」を設置、指定する科目の単位を取得することで、副専攻：国際日本学の学位を付与するプログラムを始めた。このような、副専攻のプログラムは千葉大学では初めてのものである。同時に国際戦略本部も設置、大学がグローバル化に大きく舵をとったターニングポイントである。これらはskipwise（Skipping, Knowledge stock, International support, Professional experience）プログラムとして、現在も留学推進の名称となっている。

2014年に採択された、スーパーグローバル大学創成支援事業では、その構想段階から国際教養学部の設置を表明し、見事に2016年には国際教養学部を設置することができた。経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業（グローバル人材育成推進事業）から引き継がれたグローバル化をさらに推進し、国際日本学の全学必修化、6ターム制を日本で初めて導入した。それとともに、SULA（Super University Learning Administrator）という新たな学習支援専門職（事務職系）も設置した。また全学の組織としての、国際未来教育基幹、グローバル・キャンパス推進基幹も設置し、現在のENGINEプランの素地を固めた時代でもあった。この間以下の海外キャンパス、IECオフィス、ICRC（International Collaboration Research Center）、海外オフィスを設置した。

図1-2-5-1 海外ブランチャ



■海外キャンパス

- ベルリン・キャンパス シャリテ医科大学
- サンディエゴ・キャンパス UCSD (カリフォルニア大学サンディエゴ校)
- バンコク・キャンパス マヒドン大学

■IECオフィス

- 上海 上海交通大学 ●杭州 浙江大学 ●ジャカルタ インドネシア大学
- モンテレイ モンテレイ大学 ●シンシナティ シンシナティ大学
- モスクワ ロシア人文大学 ●セイナヨキ セイナヨキ応用科学大学
- ベルリン シャリテ医科大学 ●バンコク マヒドン大学

■ICRC

- 上海ICRC 上海交通大学

■海外オフィス

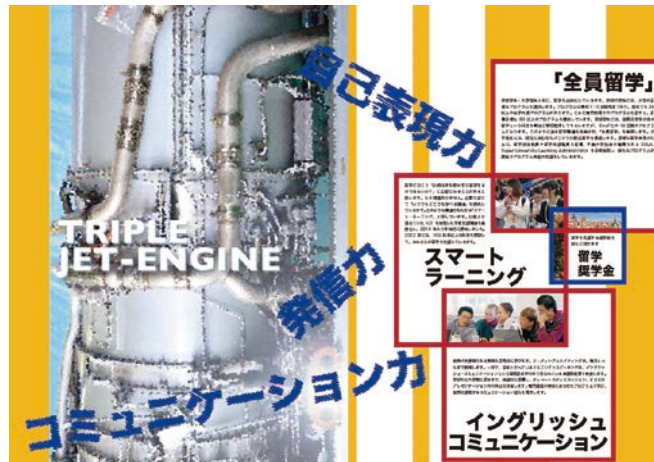
- 北京オフィス 中央民族大学 ●ホーチミンオフィス 筑波大学オフィス内
- 上海オフィス GESオフィス内 ●ベルリンオフィス シャリテ医科大学

現在進めている、ENGINE (Enhanced Network for Global Innovative Education) プランの全員留学の基となるものは、国際教養学部において海外留学を必修化したところから始まっている。国際教養学部は、学内の教育プログラムを試行する学部でもある。国際教養学部での成果をもとに、全学にフィードバックし広げていく使命を今

も持ち続けている。ENGINEプランは、2020年に開始となったが、その前から約3年間準備を行い、学生全員が十分に留学できるように整えてきた。しかしコロナ禍によりすべてのプログラムを延期せざるを得なくなった。2021年には、オンライン留学も再開したが、現在は新たなENGINEプランとしてのセカンドステージを歩もうとしている。

ではENGINEプランについて説明する。「千葉大学・全員留学」と聞くと、それだけでプログラムが運営されていると誤解されるが、実際には、ENGINEプランは、3つのプログラムによって構成されている。まず、1番目の全員留学は、確かに大きな目標である。し

図1-2-5-2 ENGINEプラン



かし、それ以外にも、英語の授業の抜本的な見直しを行い、履修単位数を倍増させている。これが2番目のプログラムであり、グローバル教育の向上に当たる。特に、リスニングやスピーキングでディベート力の向上を目指している、というのが大きな特徴である。さらには、専門科目においても、専門領域の英語を用いた授業を実施することで、英語による研究コミュニケーション力の向上とともに、研究力の強化にも貢献している。

そして、3番目のプログラムはスマートラーニングである。テクノロジーを駆使し、いつでもどこでも学べる、を実現するものである。学生の多くが留学に行きたがらない理由の大きな1つとして、留学に行くと必修単位が取れず留年してしまうことが多い、という問題があった。これを解消するために、必須単位の授業を海外からも受講できるようにするのが、スマートラーニングの1番の目標であった。このスマートラーニングをいち早く進めていたために、コロナ禍になってもスムーズにメディアやオンラインの授業に移行することができた。今後は、スマートラーニングを先鋭化し、世界中どこでも学べる環境を引き続き構築していく。以上がENGINEプランの3つの大きな目標であり、当初は日本人の誰もが知っている、毛利元就の遺訓を模して「3本の矢」と呼ばれていた。



さらにENGINEプランでは、次のように多様な履修モデルを提案している。例えば学部1年生から4年生の間に可能であれば2回の留学を経験してもらいたいと考えている。1-2年生の間に短期で1回、3年生で長期できれば1年間を1回が理想である。医学部、薬学部のように6年間の課程においては、1-2年生の間に教養プログラムとしての留学、そして5-6年生の間に専門課程における留学を提案している。理工系では、大学院へ進学することを前提として、学部での留学を1回、大学院での留学を1回も理想的である。工学部においては、3年半で卒業し、その後すぐに修士課程に進学するとともに留学する、つまり、早期卒業で欧米のアカデミックカレンダーに合わせ、大学院において1年間の長期留学を実現するという斬新なプログラムも存在する。このように様々な履修モデルを提案し学生の留学を推進している。

図1-2-5-3 多様な履修モデル



留学によって身につけてほしい能力は、発信力、自己表現力、コミュニケーション力であり、それらを備え世界で活躍する人材の育成を目指している。自らの壁を取り払い、そして国際的な感覚を身に付け、さらには英語による専門教育を受けたいと思う学生を増やし、海外を知り、海外で研究し、さらに日本を知り、自分の将来を描いてもらいたいと思いENGINEプランを実施している。

今後の要は、スマートラーニングである。スマートラーニングの全体推進を担うオフィスは、ENGINEプランの実施とともに設置した。実際には、これより前に様々なことを全学教育センターの中で準備してきた。スマートラーニングに対応できるように学生のポータルを全て変えた。

2020年にENGINEプランはスタートした。つまり、新型コロナウイルスの流行の中でスタートしたのである。したがって、2020年は、全ての渡航による海外留学のプログラムを中止した。そのため、海外大学のオンラインプログラムを提供することにより、緊急代替としての留学を実施した。1回のプログラムで、3週間の間共に学び、様々な内容を受講した。コミュニケーション能力の向上としての英語の授業に始まり、異文化理解、その国の文化、社会、経済、歴史あるいは建築に至るまで様々なものを学んだ。また授業だけではなく、現地に留学に行ったような気分を味わうために、学生チューターによる学習相談や、ソーシャルイベントとしてのオンラインクッキングの実施、フリートークングをベースとしたアフタヌーンカンパセーションなども実施した。学生によっては、実際に渡航して受講したほうが楽だと言う意見もあるほど充実した、そして厳しく楽しいプログラムであった。2021年には、39のプログラムで1,045名の学生がオンライン留学を実現、2022年は、25のオンラインプログラムで995名が、37の実渡航プログラムで770名が留学し、合計1,765名がENGINEプラン留学を実現した。傾向としては、夏に受講する学生の方が多く、夏のプログラムの参加数は冬のプログラムの倍になっている。また参加した学生は、2年生が一番多かった。

短期の留学プログラムは、8-9月と2-3月の長期休業期間に実施している。しかしオンラインプログラムを実施する過程で、極めて有効な活用方法を得ることができた。欧州及びアフリカの大学とは、時差が9時間から7時間ある。そこで大学の授業が終了した午後6時以降にプログラムを実施することで、先方は午前中の授業として提供ができ、千葉大学の学生は、通常の授業終了後にプログラムを受講することができる。これが「夜留学」である。一方で、アメリカ及び中南米の大学とは時差が14時間から17時間である。先方の大学は午後の授業として提供することで、日本人学生は、午前6時-7時から授業を受講することができる。これにより、千葉大学の学生は通常の授業が始まる前に1-2限の授業を受講できる。これが「朝留学」である。このように、時差を利用して時間を有効に活用し、通常の授業である午前9時から午後6時までの間以外の授業として留学をすることができる。留学ができない状況において、あるいは何らかの理由で留学ができない場合には、このような朝や夜のプ

プログラムを利用することも考えられ、今後のプログラムとして「朝留学・夜留学」を推進していく。

もう1つ特徴的なプログラムがある。例えば、渡航が困難、あるいは大変難しいところには、オンラインでプログラムを提供するということが改めて有効であることがわかった。アジア、アフリカや、南アメリカ、中南米の大学を対象としてプログラムを構築し実施したところ、実渡航に踏み切るのはなかなか難しい大学でも、最初にオンラインで留学し、その後さらなる興味が湧いた場合には、実渡航を実施するという2段階での留学プログラムが構築できた。さらに、このプログラムでは、「留学は2週間以上の実渡航」という目標を短縮して実施できるメリットもでてきた。ハイフレックスの授業により1週間、留学期間を1週間、事後学習を1週間とし、事前授業、事後授業をオンラインで実施することで、留学期間の3倍の学習を課し、授業を長期に渡り実施し、渡航の時間を短くしても学習成果が上がるようなプログラムを構築できた。

一方で、大学院では、基本的には長期留学を検討していた。大学院では、スーパーグローバル大学創成支援事業とともに、世界展開力強化事業で構築した様々なプログラムを大学院におけるマイナープログラムとして設置し、その中での研究留学を実現している。千葉大学はこれまで、12年間で10の世界展開力強化事業に採択されている。これは他の大学にはない特徴でもある。10の世界展開力強化事業は以下の通りである。

#### ■「キャンパス・アジア」中核拠点支援

- ① 2010-2014 植物環境デザインング・プログラム P-SQUARE/日中韓  
園芸学研究科と工学研究科が初めて共同で事業を申請したもので、植物工場の未来や、都市緑化による未来農業を創造するプログラム  
(浙江大学 清華大学 北京林業大学 ソウル大学)  
※大学の世界展開力強化事業の前段階のキャンパス・アジアとしてのプログラム

#### ■大学の世界展開力強化事業

- ② 2011-2015 大陸間デザイン教育プログラム CODE/米国等  
英国・欧州・米国の8つのデザインスクールに2カ所以上留学し、デザインや文化の違いについて学ぶ 3.5年での早期卒業+2.5年の修士課程うち1年留学を実現  
(グラスゴー美術大学 アールト大学 ENSCI-Les Ateliers KISD アベイロ

- 大学 ミラノ工科大学 シンシナティ大学 ニュースクール大学)
- ③ 2012-2016 ツイン型学生派遣プログラム TWINCLE/ASEAN  
アセアンの中学校、高等学校で、教育学研究科の学生と他の研究科の学生が一緒になって、専門領域の授業を実施 海外教育実習とも言われ、教育学領域では日本初のプログラムとして実施  
(マヒドン大学 チュラロンコン大学 キングモンクット工科大学 インドネシア大学 ボゴール農科大学 バンドン工科大学 ウダヤナ大学 ガジャマダ大学 ベトナム国立大学ハノイ校 王立プノンペン大学 南洋理工大学)
- ④ 2015-2019 ポスト・アーバン・リビング・イノベーション・プログラム PULI/中南米  
メキシコ及びパナマにおいて生活に関わる全てのイノベーションを推進するプログラムで、工業デザイン、住宅、街、都市、ランドスケープの多様なレベルでのイノベーションを創造する  
(モンテレイ大学 モンテレイ工科大学 メキシコ国立自治大学 アグアスカリエンテス大学 パンアメリカン大学 イベロアメリカーナ大学 パナマ大学 パナマ工科大学)
- ⑤ 2016-2020 植物環境イノベーション・プログラム CAPE/日中韓  
植物環境デザイン・プログラムの後継で、農業の6次産業化を推進する人材を育成 生産からオンラインサービスまで一貫したビジネスモデルを提案  
(延世大学 浙江大学 北京林業大学)
- ⑥ 2017-2021 極東ロシアの未来農業プログラム FARM/ロシア  
極東ロシアにおける未来の農業を施設園芸の観点から展開する 日本と極東ロシアの両方で演習を行い施設園芸の最先端テクノロジーとビジネスを学ぶ  
(サハリン国立総合大学 ロシア国立沿海地方農業アカデミー ノボシビルスク農業大学 極東農業大学)
- ⑦ 2018-2022 COILを使用した日米ユニークプログラム JUSU/米国  
COILプログラムを中心に、日本でしか学べない、米国でしか学べないユニークな学習をオンラインと留学の両方で実施 能狂言や浄瑠璃、ジャズ、スポーツビジネスなど多様なプログラムを実施  
(アラバマ大学 ニュースクール大学 ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校 シンシナティ大学)



- ⑧ 2019-2023 光イメージング IMLEX/フィンランド ベルギー フランス  
(幹事校：豊橋技術科学大学 千葉大学はアソシエートパートナー 東フィンランド大学 ルーヴェン・カトリック大学 サンテティエンヌ ジャン・モネ大学)
- ⑨ 2021-2025 ソーシャル・デザイン・イニシアティブ SDI-A/日中韓 ASEAN  
デザインがリードし、世界中の様々なウィキッド（厄介）な課題に対応する海外2カ所以上で課題を解決するサーキット型のトレーニングを主体  
(芝浦工業大学 延世大学 浙江大学 マヒドン大学 キングモンクット工科大学 ナレスアン大学 国民大学 マレーシアプトラ大学 マレーシア工科大学 FPT大学 シンガポール国立大学 バンドン工科大学)
- ⑩ 2022-2026 グローバル地域ケアIPEプラス GRIP/インド オーストラリア 英国  
看護学研究科がリードし世界に展開する 世界の多様な看護・ケアに精通した知識を獲得し、世界中でさまざまな起こり得る生命科学の課題に対応する  
(シンビオシス大学 モナシュ大学 レスター大学)

大学院では、基本的には長期留学を推奨しているが、世界展開力強化事業で構築した様々なプログラムを大学院におけるマイナープログラムとして設置しており、その中で短期の研究留学を実現することができている。また大学院では内容が専門的になるために各部局で留学プログラムを設置するように計画している。

これらの、世界展開力強化事業の内容は、部局を横断するような課題を扱うプログラムが多く、それらを全学に提供し、マイナーの学位を付与するプログラムとしている。組織的な研究留学を推進することによって、研究力を強化するとともに、日本人でありながらも千葉大学に在籍する時間を短くして、海外での長期研究を大学が後押しをしながらプログラムを実行するという事も実施している。

世界展開力強化事業では、2021年と2022年にコロナ禍においてもグローバル化を積極的に推進し、2つの世界展開力強化事業を獲得することができた。これは修士の研究ともリンクしている。

その1つは2022年に採択された、グローバル地域ケアIPEプラス創生人材の育成である。このように研究に根ざした教育プログラムを構築、必ずその専門領域がリードし、それとともにそれを全学に発展するという事を大学院のプログラムとして実施している。そしてこれらを履修した学生には、一定の単位を取得した後に、工学や

看護学のマイナーの学位を発行するということを行っている。

これらは全て、「大学院国際実践教育」として2018年から始めている履修システムを利用している。

他にも多くの大学院におけるマイナーのプログラムを世界展開力強化事業の成果として設置している。JUSUとは、ジャパンUSユニークプログラムであり、本プログラムはCOILを用いた学習システムを利用した共同学習プログラムである。日本の伝統芸能、災害、高齢者看護、デザインシンキングなど多彩なプログラムをアメリカの大学と行っている。CAPEはキャンパスアジアの第2モードプログラムである。プログラムの一部は、SDI-Aに組み込まれているが、このキャンパスアジアで行われた農業の6次産業化については、今なおプログラムとして様々なことが行われている。PULIは、メキシコと連携した環境創生型のプログラムであり、東京の新たなキャンパス墨田サテライトでワークショップを実施している。CODEプログラムは、先述した3.5年で早期卒業するもので、デザイン系の学生が毎年5-10名ほど1年間の留学を実施している。

大学院の留学は先述したように大きく2つの方向性を考えている。1つはこれまで

図1-2-5-4 グローバル化の軌跡



に出てきたような短期型のプログラムを全学に展開すること、そしてもう1つが長期型のプログラムを実施することである。キャンパスアジアのSDI-Aプログラムは、サーキット型研究留学を推進することで、例えば1年近く海外に留学していても、それが研究とリンクし様々な研究を推進することができるようなプログラムとして構築していく。デザインの学生だけでなく、他の領域からも社会課題の解決に参加することによって本来の研究を推進することが十分に可能と考えられている。これらの研究成果をまとめることによって、修士・博士の研究成果を得ることになり、学位につながる。

そして、さらにもう1つは、未来創造型のプログラムである。ライフサイエンス+データサイエンス+グローバル+デザインで、未来志向型の創造型人材を育成していく。新しい学習モデルを構築しプログラムとして提供していこうと考えている。これには少し時間がかかるが、ENGINEプランのセカンドステージの大きな目標として掲げプログラムを実施していく予定である。

## 第6節 海外キャンパスの展開

### 第1項 シャリテ・ベルリン医科大学



写真1-2-6-1 シャリテ・ベルリン医科大学